

愛の漂泊

佐藤生人



爱的漂泊

愛の漂泊

定価九八〇円

昭和五十三年三月十五日 初版発行

著 者 佐藤 生人

装幀者 桜井幸太郎

発行者 山田 和明

発行所 株式会社 海 潮 社

東京都中央区銀座七丁目十二一六

トキワビル

電話 ○三五四二一六二七一〜三

© 1978, IKUTO SATOH

0095-533030-1042 落し・乱丁本はお取替えます

愛の漂泊

目次

一	鯨の網舟	8
二	暗雲の漂流	37
三	奇蹟の陸	64
四	天売島の初夜	79

五 跛行の脱出

114

六 雪の漂泊

142

七 氷の果て

169

八 隻歩の出発

183

あとがき

愛あい
の
漂ひょう泊はく

雪道の
阻むにめげず
わが愛を生く

一 鯨の網舟

「父ちゃん、鯨が浜にきたよお！」

中村洋三なかむらようぞうが家に駆けこんできたのは、もうかれこれ、夜の九時半を回っていた。

建築してからすでに五十年ちかくもたつ洋三の家は、まだ屋根の上が草葺きだった。この近くの漁師の家は、どれを見ても古い建物が多いが、とくに彼の家は見るからに貧弱で、いまにもつぶれそうだった。柱は大きく傾き、障子をしめても、上の方が五センチも隙間があいていた。

長い冬が過ぎた頃は、表口の引戸はとくに重い。幼い洋三の小さな手では、

力いっぱい引かなければ、戸がきしんで家の中へは入ることができなかった。

「鯨が浜にきたんだよ！」

あまりうるさく言う洋三の言葉に、母親のサワは、

「ほら、父ちゃん、洋三がこんなに言ってるんだから、浜に出てみたらどうだの」

父の小吾は、洋三とサワに言われて、しぶしぶ腰をあげる気になり、海辺がすぐ下に見える瀬越岬に出たのだった。

洋三の家は、祖父の小吾郎の実権がまだまだ強く、沖に行くのも彼の指示がなければ、行くことができなかった。春の鯨場時期になると、夜の六時頃から一時間くらいの間隔で洋三と父が交代で、かけ回しといって、定置網業者の出ている海岸を見に行かなければならなかった。それが漁師である彼の家の習慣で、洋三もそれが自分に与えられた当然の仕事と思っていた。

この夜も、瀬越浜と反対方向にある家から、やっと七歳になったばかりの洋

三が海岸にかけ回しに来ていた。

瀬越岬から見た留萌^{るもい}海岸の夜は暗く、静かだった。左手に見える陸地は、西へ大きく突き出している増毛町、別刈村のある雄冬岬の山かげである。月明りで薄くほのかに見える暑寒岳には、六月近くまで頂きに雪が残っており、その雄壮な姿はいかにも北国の山という感じがする。

右方には、小平、鬼鹿、羽幌と陸地が湾曲している。夜になると、点在する町灯りを目じるしに漁船が港に帰ってくる。この沿岸は、これから鯨漁の最盛期に入るのだった。留萌海岸の浜では、大勢の人が漁の仕事をしている時季だった。

塹^{ねぐら}を忘れた鷗が一羽、空を高く飛んでいった。この留萌沿岸には定置網業者が多い。海上には、陸地から百メートルぐらいのところに、石油ランプの灯がいくつも見える。これが定置網の目印なのだ。

洋三は細っそりした身体の子供だった。ズボンのあちこちに、大きな当て布

が手縫いでついている。うすよごれたように変色したコール天の上着を着、手ぬぐいで小さな頭をうまく包んでいた。一見して、貧しい漁師のワンパク小僧とわかる姿であった。

北国の三月の初めは、まだまだ外気が冷たい。朝夕は身にしみ入る寒さである。空地のところどころに雪が残っている。

母の作ってくれた綿入れの手袋をつけた洋三は、瀬越岬の高台から、五十メートルくらい下の船入間におりてみることにした。

海岸の定置網番屋から出てきた連絡係の男は、洋三を見ると、

「アンちゃん、どうしたんだ」

と洋三に話しかけてきた。

「うん、おれ、さし網やっている家のものだ。いま、かけ回しに来たんだよ」

「そうかそうか、小さいのになかなかえらいな。そんなら、おまえに教えて

やるか。ほら、その海を見てみる、白く見えるだろう」

「うん、見えるよ」

「そいつが鯨だよ。鯨が海岸で産卵すると、このように海が白くなるんだ。メスが数の子を海草に生む、それにオスが白子をかける。それがあのように海面を白くするんだ」

番屋から出てきた男は、洋三にわかりやすく教えてくれた。洋三もこの土地で生まれ育ってきたが、いままで鯨の産卵する場面を一度も見ることがなかった。番屋の男は話をつづけた。

洋三は、言われるままに海辺を見ていた。なるほど、海面がますます白くなっていた。小さな洋三にも、いつもの海の色とちがうことはすぐにわかった。睡い目を小さな手でこすりながら、じっと海を見つめていた。

鯨は、北の海から寒流に乗って、北海道の西岸の沖合をどんどん南下してくる。そして暖流とぶつかる。小樽、岩内方面から、海岸線に沿って産卵しなが

ら、再び北上する。そのような習性をもつ魚である。

「アンちゃん、これからどんどん沖の定置網に鰯が入っていくんだぞ。早く家に帰って船を出すんだな」

と言う番屋の男に促され、洋三がいったん家に帰って再び舟で海岸に戻って来たときは、定置網に入った鰯をかけ声も勇しく追い込む最中だった。

一か所の定置網には、岩手、秋田地方から三十人ちかくの漁衆やんしゅうが働きに來ている。この季節になると、留萌の人口は急に多くなる。街並みの商店も店先の氷を割り除き、通行人が足をとられないようにする。それが店員の日課でもあった。

若い頃から髪の毛のうすい祖父の小吾郎は、四角の大きな布を三角形に折り、その布を頭にかぶり、額のあたりを横に手拭いを巻きつけている。このほかおむりが、この辺で春によく見かける漁衆独得の姿だった。

父の小吾も、同じ姿で舟に乗っている。四メートルくらいの長さの漁船で、

洋三は舳^{へさき}先に艫^{とも}の方を向いてすわっている。小さな手で早^{さう}櫂^{かい}を持つ姿は、あどけなくさえ見える。しかし力いっぱい漕がなければ、父に大きな声で叱りつけられる。

ちょうど舟の真ん中に、鯨をとるさし網を小山のように積んでいる。小吾郎が艫^{とも}櫓、小吾が脇^{わき}櫓、洋三が早^{さう}櫂^{かい}と、親子三代の鯨舟だった。

洋三がかけ回しに来て、さっき見た岩場は、すでに海一面どこもここも真白くなっていた。その辺にいくと、小吾が大きな声で言った。

「洋三、早^{さう}櫂^{かい}で水面をたたいてみる」

洋三は早^{さう}櫂^{かい}で水面をばしとたたいた。水中を鯨の逃げ回っているようすが、ぼんやりと洋三の目に入った。この海の中に鯨がたくさんいるのだ。舟の上からも見える。月明りのせいだろう。

洋三は言った。

「父ちゃん、早く網を入れよう」